

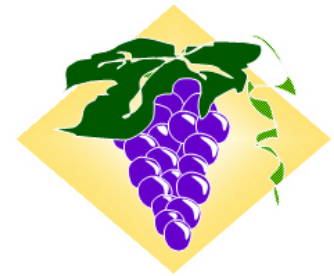
教会暦と聖書の流れ

先週の「二人の息子」のたとえに続き、イエスは神殿の境内で、祭司長や民の長老といった当時のユダヤ人の指導者たちに向けて、この「ぶどう園と農夫」のたとえを語っています。

ぶどう園で働いていた農夫たちが、収穫を受け取りに来る主人の僕にひどいことをし、主人の息子を殺してしまう、というこのたとえ話は、迫り来るイエスの受難を予感させるものだとも言えるでしょう。

福音のヒント

(1) このたとえ話はマルコ 12・1-11、ルカ 20・9-18 にもありますが、細部は少しずつ異なっています。マルコやルカと比べてみると、マタイの特徴がいくつかあります。マルコ、ルカでは主人は 3 人の僕(しもべ)を 3 回に分けて送っていますが、マタイでは複数の僕たちが 2 回に分けて送られています。マタイは旧約の預言者たちをバビロン捕囚(紀元前 6 世紀)以前と以後に二分しているのではないかと考えられます。また、最後に送られる息子について、マルコやルカでは「愛する息子」という特別に神の子イエスを思わせる言葉が使われていますが、マタイはただ「わたしの息子」と言います。もちろんマタイでもこの「息子」はイエスを表し、それが当然過ぎるのであえて強調しなかつただけかもしれません。なお、どの福音書でもこの息子が「ぶどう園の外」で殺されているのは、イエスが当時エルサレムの城壁の外にあったゴルゴタの丘で処刑されたことを反映しているようです(ヘブライ 13・12 参照)。



43 節の「だから、言うておくが、神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる」はマタイだけが伝える言葉で、明らかに「あなたたち」はユダヤ民族を、「ふさわしい実を結ぶ民族」は異邦人を指しています。しかし、これは福音書の文脈には合いません。福音書ではイエスが批判しているのはユダヤの指導者たちだからです。マタイは伝承に手を加えて、新しい意味を見いだしているのだと言わざるをえません。

(2) 42 節の旧約聖書の引用は、詩編 118・22-23 からのものです。マルコ福音書では、イエスを拒否したユダヤの指導者たちに代わり、貧しい民衆が神の国を継ぐようになった、ということを表しているように読めます。しかし、この詩編の句は、新約聖書の他の箇所でも復活したイエスに当てはめられています(使徒言行録 4・11、ペトロ 2・7 参照)。初代教会の中で、イエスこそ「人に捨てられ、神に選ばれた石」と考えられたのは当然でしょう。マタイもここでイエスの死と復活を考えているようです。

なお、文脈を抜きにしてこの詩編の言葉を味わうこともできるでしょう。「人に捨てら

れ、神に選ばれる」ということはわたしたちの体験の中にもあるのではないのでしょうか？

(3) 実は、きょうの箇所が続いて44節には「この石の上に落ちる者は打ち砕かれ、この石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう」という言葉があります。写本によってはこの言葉のないものも多いので、本来マタイにはなく、ルカ20・18から転用された言葉だとも考えられます。これは終末における裁きを表す言葉だと言えます。

以上すべてのことから、マタイはこのたとえ話の中に「救いの歴史」全体を見ていると考えられるのです。神は旧約時代に預言者たちを遣わしたがイスラエルの民は彼らを受け入れなかった(34-36節)。最後に神はご自分の子を遣わしたが、このイエスも迫害され、殺された(37-39節)。しかし、神はイエスを復活させ、救い主として立てられた(42節)。そして神の救いはユダヤ人ではなく異邦人に与えられるようになった(43節)。イエスは最後にすべての人を裁くために来られる(44節)。これがマタイの見ている「救いの歴史」の中身です。

(4) 冒頭33節の「ある家の主人がぶどう園を作り、垣を巡らし、その中に搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て」は、イザヤ5章(この日のミサの第一朗読)を思い起こさせます。

「1 わたしは歌おう、わたしの愛する者のために / そのぶどう畑の愛の歌を。わたしの愛する者は、肥沃な丘に / ぶどう畑を持っていた。 2 よく耕して石を除き、良いぶどうを植えた。その真ん中に見張りの塔を立て、酒ぶねを掘り / 良いぶどうが実るのを待った。しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。 3 さあ、エルサレムに住む人、ユダの人よ / わたしとわたしのぶどう畑の間を裁いてみよ。 4 わたしがぶどう畑のためになすべきことで / 何か、しなかったことがまだあるというのか・・・」この言葉は、主人(神)がすべてを配慮し、はじめから整えてくださっていたのだ、ということを印象付けています。

(5) それなのに、なぜ農夫たちはこれほど残虐な行為に走ってしまったのでしょうか。彼らは主人がずっと不在だったことから、いつの間にか、主人から与えられたものを、自分の力で得たもののように思い込み、主人からゆだねられて、管理をまかされたものを、自分の所有物だと勘違いしてしまったのではないのでしょうか。そして、「自分のものに指一本触れさせてなるものか」と感じるようになり、収穫の分け前を受け取りに来る主人の僕や息子のことを、自分たちの物を奪いに来る泥棒としか思えなくなっていったのかもかもしれません。

イエスが戦ったのは、人々のこのような考えに対してでした。そして、この人々の姿は、実際にイエスを死に追いやった人々の姿と重なります。

それはわたしたちにとっても他人事ではないでしょう。わたしたちが「神から貸し与えられたもの」「管理をゆだねられたもの」とは何でしょうか。地球の資源や環境？ 自分のお金や持ち物？ 力や才能？ 地位や立場、さまざまな特権？ それらは皆、神がわたしたちにゆだねたものなのではないのでしょうか。それをわたしたち人間は、いつの間にか、自分勝手に使ってよいものと思い込んでしまっていることがあるのではないのでしょうか。